

磐城商工時報

月刊三回發行、五日、廿五日、廿九日
發行所 磐城商工時報社
印刷所 加納活版所
廣告料 玉置町三丁目
社址 玉置町三丁目
電話 二二二
新刊定額 一月五圓、三月十圓、半年二十圓、一年四十圓

財界の好轉

中央都會に於ける經財家の觀測として財界の不振は本年度の春頃に至らば恢復するものと稱へられたものであるが、今日に至りては其説も鳴りを靜めて尙不況を啣ちつゝあるは誠に遺憾に堪わぬ所である、大正九年以來我財界が不況に傾き生産取引は減少し、其一面に國民の放資は漸増の傾向にありし爲めに我金融界は緩漫を示し銀行や保險會社の如く高率の資金を預つて居る金融業者は高率の放資金を要求するに至つたので、固定資本を抱く諸企業はその機に乗じて固定資本を金融すべく高率の借金を申込んだのである、斯くて高率であることの爲めに社債は濫發され、市中銀行の貸出は増加せらるゝに至つたのである、其結果は一面企業の整理を防止せらるゝに至れると同時に、他面には各企業は高利にせめられて利息支拂に窮し利息を支拂ふために拂込を徴收したり更に借金したりして居るのであり、即ち生産力の無い固定資本を維持する爲めに借金をするのであるから借金は更に借金を産むのみであり、其爲めに長期金利は益々低下し得ないことなるのである、然らば企業家は何故に固定資本を強いて維持せんとするのであるかと云ふと夫は自

仁俠の小田吉治氏 好間農民を救ふ

自費を投じて早魃の田地に引水す

二十年前に秋田縣の片田舎からの田園は全く旱害の爲め田地數飛出して遂に炭礦王として羽振町歩は稲苗の移植する事が、不況をさかしてゐる小田吉治氏は可能に陥り農民も止むなく數町筒井氏に見込まれた事に依りて今歩田地は、手をつけずに、傍觀するより外途が無かつた、この窮狀を聽いた小田吉治氏は唯この炭界の好況に面して

小炭礦を經營してゐる中、既に百萬の富を積み一躍小田炭礦株式會社を組織したが、氏は自ら小田炭礦會社の社長に納まり返つてゐる事に満足せず單獨事業として、隅田川、津川の兩用水より寺臺迄約二百間の間を炭礦を經營して尙營々として活引水して、數町歩の田地に灌溉動してゐる、氏は涙もあれば血を流した爲め農民は小田氏の好意に感激し乍ら田植も出來手離してあきらめた數町歩の田も今

ないものなく好間村民も何等かの形に於て小田氏に對し感謝の意を表しなければならぬといふ事、

銀行會社の 今期の成績

▲磐越銀行 今期の成績を見るに他銀行に比し極めて健全な跡を見せし事だ、一體同行には、借入金が無いといふことが、如何に力強いものがあるであらう、今期の利益金は二萬四千五百二圓十四錢、法定準備金が二千圓、特別積立金が二千五百圓、重役賞與金が四百二十七圓六十四錢、株主配當金九千五百七十四圓五十錢、後期繰越金一萬圓

▲平銀行

同行當期の純益金は八萬六千六百七十五圓、諸積立金二萬五千圓、重役賞與金參千五百圓、配當金參萬參千七百五十圓、後期繰越金二萬六千四百貳拾五圓にして配當は年九分である

▲四倉電氣

當期利益金一萬七千九百七十六圓九十三錢、純益金が一萬五千四百七十六圓九十三錢、前期繰越金八百八十九圓二十三錢而して九千七百五十圓を株主配當として年一割二分、壹千六百二十五圓を紀念配當をなした。

▲磐城實業

當期純益金一萬二千六百一十一圓七十八錢、

鬼才縦横の 武田營業所長

基礎を築いた 手腕と力量は並ぶ者無し

氣骨あり、氣轉あり而して圓轉あればどんな不評判な銀行でも滑達な東部電力株式會社平營業會社でも、忽ち好評を受け不成熟長武田精一氏は内外の信用年積も一轉して良成績を擧ぐるであらうとは、よく

新經營秘訣

新經營策として興味あるアメリカの話を二つ茲に紹介す、(一)米國の或新聞社は四五年前、一時名士と謳はれた人々五百五十名の行衛を調査したことが、

その中には財界の腕利きも政界の名士も、言論界の大立物も加はつて居つた。そして調査の結果、その内九十七名程は御馳走倒れの早仕舞に終つたものである、餘りチャホヤされて、毎夜の宴會に招かれた結果が胃弱に取りつかれ、脳味噌は働らかす、萬事を擲つて世捨人の生活をする事になつたのである、働くべき身が、夜更しと深酒で粉になりかけて居ては、さて此所が

大黒屋の開店

毎日満員の盛況 小間物、化粧品、専問として噂らしてゐた大黒屋商店では平銀行向へに洋館の店舗を新築し此程落成花々しく開店したが、小間物化粧品の外に洋品一切を販賣するといふので、毎日顧客満員の盛況振りを示してゐる。

メートル法 展覽會

メートル法促進を徹底せしむる爲め來る八月十日より十二日迄三日間毎日午前九時より午後十時迄舊郡役所公會堂に於てメートル法展覽會を開催する。

能率を増すばかりでなく、労働者の購買力が殖えるから、産業全体の繁榮となる。(二)同業の競争者は俱樂部なり協會なりへ集まつて特長や新發展を惜氣もなく吹聴し同業及び社會全体の向發展を念かけて居る。(ホ)常に無駄征伐を心がけ、時間、精力、空所は決して浪費しないことに肚を決めて居る。以上は別段新しい説でも思はれないが、更にフオート自動車、土曜、日曜の二日間を休息としたならば、勤勞者の物を消費する量は一層殖へるのであらうと論じて居るのである、時間は長く、與ふるものは少くとも云ふ、世智辛い日本の一般状態から見れば、大いに學ぶべき点を發見するのである。